

2025年も残すところあと1日となり、映画を見てる場合じゃないという方もいらっしゃるかもしれませんが、僕は映画を見続けますね、相変わらず。今回は2025年に公開された新作を3本とりあげます。

■ コラリー・ファルジャ『サブスタンス』 (2024)

コラリー・ファルジャは、1976年パリ生まれの女流映画作家で、これまで2017年に発表した『REVENGE』が長編一作目であり、本作が二作目であり、脚本も担当しています。wikiによると、「現実を疑うという行為に強い関心を持ち、イメージやシンボルを用いてシンプルなものでも力強く表現することに長けて」いて、「暴力シーンをユーモアを交えることでバランスをとり、暴力をより許容できるものと考えている」とあり、また、「オマー・ジュヤ言及（レファレンス）であふれかえる映画作品は、観客が映画に共感することを妨げる」と考え、影響を受けた監督の一人にミヒャエル・ハネケを挙げます。デヴィッド・リンチも挙げるのは当然として。

ロバート・ゼメキス監督でゴールド・ホーン、メリル・ストリープ、ブルース・ウィリス主演の「永遠に美しく---」（原題『Death Becomes Her』）（1992）という作品がありましたが、この女性の美に対しての飽くなき執念を描いた作品はブラックコメディとしての面白さを十分に発揮したものでしたが、本作はそんな生やさしいものではなく、ボディ・ホラーと呼ばれる肉体変容ホラーの本格派であり、その過激さはマックス・レヴェルに達します。ルッキズム（外見至上主義）とエイジズム（年齢差別）の残酷さを強烈に描いた風刺であり、コラリー・ファルジャは「女性が強いられる不可能な美の基準」への怒りを込めた「フェミニスト・メタファー」と発言しています。主演のデミ・ムーアの恐るべき演技にも心底驚かされます。

本作に揺さぶられ、それならこの7年前に公開された彼女の長編第一作目となる『REVENGE』（2017）を見てみようという衝動に駆られ、早速見ることに。この作品のプロットは、レイプされ死に追い込まれた若い女性の復讐スリラー劇であり、弱者に見えるキャラクターが復讐を果たすスーパーヒロインへと変身を遂げるところが見ものです。得てしてこの種の作品は御都合主義的な破綻に満ちた三流作品に墮す可能性が大きいのですが、若干の都合よきはあるものの、三流作品に墮すことなく全編をまとめ上げたのは、ファルジャの理性と才能ではないでしょうか。この作品は、『サブスタンス』に向けての助走であり、予兆を感じるものです。「女性に強

いられる不可能な美の基準」へのおおいなる怒りの表現ともとれますし、フェミニズム作品でもあります。この「レイプ・リベンジ」ジャンルの作品は、これまで男性監督が男性観客のために女性への暴力を搾取的に描く見せ物的傾向のものでしたが、ファルジャはその伝統的な枠組みを借りつつ、女性の身体性や痛みをリアルかつ過激に描くことで、このジャンルを女性の手に取り戻したという評価も出ているそうです。サム・ペキンパーや深作欣二どころではない血の量は何と言うべきでしょうか。このヴァイオレンスとブラッドは只者ではありません。フェミニスト・レイジが沸々とし、「#Me too」との関連性とも明白に感じるところです。

■ マグナス・フォン・ホーン『ガール・ウィズ・ニードル』 (2024)

デンマーク、ポーランド、スウェーデン合作のこの作品は、スウェーデン系ポーランド人監督のマグナス・フォン・ホーン（1983- ）の作品です。2015年に監督デビューを果たし、これが三作目の新進映画監督が選んだ題材は、1913年から1920年にかけてデンマークで実際に起きた養子縁組を装って預かった乳児を26名殺害したダグマ・オーバード事件を基にしたものです。本作では、カロニーネという若い女性を主人公とし、彼女が産んだ私生児をダグマ・オーバードの許に連れて行ったのをきっかけに、乳児殺しの実態を知らないまま彼女の仕事に関与する様子を描いていきます。本作は白黒画面で描かれ、その白黒のコントラストが見事に強烈な表現を生み出します。時代は第一次世界大戦の終戦を挟む時期であり、初めての総力戦という形態の大戦での犠牲者、これは顔面の半分近くを失った主人公カロニーネの夫、貴族階級の一般庶民に対しての理不尽な扱い、そして主題ともいべき乳児殺害が重苦しく描かれ、富めるものと貧困にあえぐものとの二項対立を前提とした、どうしても相容れない社会の分断がテーマになります。また、特に救済という言葉の真意を考えなければならないでしょう。宗教的な意味合いだけではなく、人間が生きていく上で必要とされる重要な要素としてです。この光と影のコントラストには混沌とした社会を表すものであり、そのラストシーンでようやく希望の光がのぞきます。

■ 呉美保『ふつうの子ども』 (2025)

呉美保と脚本家の高田亮とは、『そのみで光り輝く』（2014）『きみはいい子』（2015）に続く10年ぶりの三作目であり、呉美保は昨2024年の『ぼくが生きる、ふたつの世界』に続く新作で、順調な仕事ぶりがうかがえるとともに、その好調を持續している感があります。子ども（小学校4年生）を描いた作品ですが、子どもの世界は大人の世界の縮図であり、また不完全・未成熟

のままの人間の行為・行動の根底にあるものを探る上で、呉美保と高田亮のスタンスはそれを肯定も否定もしないバランスのとれたものになっています。今年2025年に公開されたベルギーのローラ・ワンデルの秀作『playground』（2021）に優るとも劣らないリアリティックな子どもの世界を描いた作品として印象深い作品です。画面全体を貫く明るさは、その映像美と共に自由に痛快で澄み切ったもので、カタルシスさえ感じさせてくれます。最近の小学生を題材にした作品といえば、山崎エマ監督『小学校 それは小さな社会』（2024）是枝裕和監督『怪物』があり、その比較論はここでは避けることにしますが、特に『怪物』における藪の中のミステリー要素を持つ構造よりも、ローラ・ワンデルそしてこの呉美保の作品の方が、子どもを理解する上で社会との関わりを理解する上でより明晰であるように思えます。子どもが不完全・未成熟だといえば、大人だってそれ以上の不完全性と未熟さを曝した存在であり、単純に大人の理論を振りかざすことは憚られるものです。判断力・思考力・想像力が試される社会の構成員として問われる度合いが益々大きくなるのではないかと、この先を危惧しながら見た作品でもありました。